

## 現 場 余 録

## 光学系観測班の人々

ロケットの飛跡を追跡して、ロケットの飛しょう方向、高さ、速さ、飛しょう時間等を計ろうとする観測班は、丸安教授、植村助教授の担当である。この班はランチャーを中心に、左右と後方に適当な場所を物色した。ランチャーは真西に海へ向けて据え、なぎさから 50m 程の所にあり、海岸線は、ほぼ南北に走り、北は秋田港へ向かい、南は本荘市を経て平沢に達する。31年9月の観測に設定された北観測点は、ランチャーの北方約 5km の海際で、秋田市下浜町の南端に入る。南観測点は、ランチャーの南方約 4km で岩城町二古部落となる。東観測点は、ランチャーのやや北寄りの東方約 0.7km でランチャーを見下ろす勝手部落後方の小高い山上に定められた。いずれも見通しのよいことが絶体条件で選ばれた地点故、風当りも避けられない。観測班の人々が、朝観測点に入ってから準備を完了するまでには、2時間位を要する。通信連絡はすべて無線電話で、本部や各観測点間の連絡をとるが、物を運んだり、実際に行かねばならない連絡は、山路を徒歩、国道をジープと乗用車を改造した小型トラックとで行うのである。丸安教授は、専門の写真測量で山間へき地を歩きまわった健脚を持っていられるが、植村助教授は、実験班随一の巨軀でありながら、若さと天与のあふれるエネルギーを出しつつ奔走される。ご両所の真剣な態度と気魄が、よく班員を統率してみごとなチームワークを作りあげているのである。

さて数日かかった設営と、その朝の準備とが、実を結ぶのは、発射以後の数秒で決するのだから、なかなか神経をすりへらすことである。この班の人々は、いつも天候を祈って暮らす。雲の往来の多い時は、その中で青空のチャンスを祈る。青空は、青空でも北か南までの観測点を含めた範囲 10km の広さでなければ困る。ロケットの尾を引く煙跡は、観測班の唯一の目標であって、これが雲に突入すると追跡も止まる。こんな時の観測者の気持は、真に痛恨千万といたい。同じロケットを追跡するレーダ班、テレメータ班が全く晴曇に左右されないでいられる立場にくらべると、

成否如何を天運と取組むこの班の人々は、望遠レンズから人間的な触感を人一倍感じているにちがいない。

## 勝手川行状記

秋田実験場の設営班 S 君から生研へ電話が入って、高速度カメラ室の仮設小屋が、勝手川はらんんで危いということである。勝手川が海の時化と秋の出水で川口付近を徐々に変えているのである。高速度カメラ室は、海に近く、川岸にも 10m の近距離の位置に、撮影位置の都合で選んで仮設したもので、それはちょっとしたコンクリート造りの基礎台の上に簡素な小屋をのせたものである。早速、植村助教授と連絡をとった。植村助教授の指示は、カメラ位置は、ランチャーから測量した一定位置にあるので、大巾な移動は好ましくない。できれば 10m 程度の移動ですましたいという。あとは現地の S 君の判断も入れて、10m 程陸側へ上った所に移転してもらった。あられや粉雪まじりの降る 11 月のはだ寒い日、私がこの現場を視察した時はすでに移設も済んだあとで、旧のコンクリート台は、半ば河川にえぐりとられて、がけにくずれ落ちていた。

ところが勝手川の猛威は、さらに週日にして、移設点に接近して、またまた危く見えて来たのである。衆議即決、カメラ室は、50m 以上陸へ後退することにした。動きつつある勝手川のへりに立つと、3m の深さ全部砂そのものである。足許の砂が巨像の背に立てばこうかと思われるようにジワリジワリして、くずれようとする気配を感じさせる。地理調査所の測量地図では無名の小さい川にも、地異天変が起きれば、たちまちたくましいすがたとなって映じる。夏と冬とでは、川口の水路や川巾も変るし、5、6年前の測量地図とくらべると川口は、大分北へ移動している。しかし、われわれ飛しょう実験班にとっては、この川の南岸でペンシルやベビーの処女実験をやり、今また北岸へ実験場を移して国際地球観測年としての有終の美をおさめようとしているのだから、縁の深い次第といわねばならない。それにつけても彼女は、勝手という名にふさわしい気ままな振舞いをする川である。

(1957. 4. 14, J. S)